2022年
10月

マナ通信

今月のマナ通信は、
◎８月の聖書日課（コリント人への手紙第１・第２）
◎土・日曜日の学び（世界に広がる福音、キリスト者の働き）の感想です。

一人で生活するのは寂しい。心の支えが無くなり、生活に空虚感が漂う。面影が残る物は気持ちが揺らぐので早く処分したい。やはり、女性が後に残り、男性が先に死ぬ方が良いのではないかと思う。

コロナが面会を許さず、病院での死はわびしいものとなった。だけど、この世の中に一人で生活している人は沢山いる。私は思うが、そうするしか仕方がないから、毎日毎日耐え忍んでいるのだと思う。

神のことを以前にも増してよく思う。神は進むべき道を示し、力を与えてくれる。神は永遠の昔から存在し、わたしは「わたしはある（エゴーエイミ）」と云う者だと自分を紹介している。また、「ことば」だとも言っている。言葉は考えを伝える大切な手段だ。

神は天地を創造し、今も生きて天から聖霊を送り我々の助けをして下さっている。神は全知全能で全てのことを知っていて、我々の髪の毛の本数までわかる。

また、神は「偏在」であられ、どこにでも現れてくれる。この事は、神には場所と時間がなく、過去、現在、未来の区別が無く、又、世界中を一瞬にして駆け巡ることが出来る。そのことはやはり神は全能であることを物語る。

神は、聖く、正しく、罪と交わらず、罪を罰します。又、神は愛ある方で、被造物である人間を神様の方から愛して下さった。もともと、神は人間を神に似た者として造られた。地の塵で形造った人間にそっと息を吹きかけると、人間は霊を与えられ生きた者となった。そして神は、人間に自由意志を与え、この世の全ての動植物を支配する権限を与えて下さった。人間は神が創られた最高の被造物であった。

だが、人間は悪魔のささやきに心を奪われ神の掟を破り、神との交わりが持てなくなった。自分かってに善悪の判断をし、損得勘定が激しくなり、損得には手段を選ばなくなった。だいたいいつの世もどこかで戦争が起こっている。しかし、人間には良心があり、破滅に走ることは少ないと思うが、失敗、不正との谷間でいつも苦しんでいる。

そのため、神は、苦しむ人間を憐れみ、愛の手を差し延べて下さいました。自分のひとり息子、御子を受肉させて、この世に送り出して下さいました。インマヌエルの神であられ、人間である御子は、我々、全ての人類の罪を一身にまとい苦しみながら、神からの罰を受けて下さった。十字架上で罪の代価を全て支払ってくださった。御子の十字架上の働きを父なる神は天から眺め非常に満足し、喜んだ。御子は父なる神の御こころに従って素晴らしい働きをしてくれた。

その結果、死人を生かし、無から有を生み出すことが出来る神は御子を復活させた。御子が生き返った。まさに、「イエスは主」であった。その時、父なる神のご計画が成就しました、それはイエス様の死は我々の罪の為であったと信じる者を義と認めて下さったことです。

我々クリスチャンは神の御霊を頂き、賜物を授かった。義人とされ、神の子となった。イエスを長子とする兄弟になった。しかし、この立場がどのようにして造られたのか、これは全て神様が行って下さったことであり、自分の努力、力はどこにもない。全て神様がこのようにして下さった。これはとりもなおさず、「栄光は全て神にある」のである。これからは、神をもっと良く知るため、神に近づき自分から積極的に話しかけたいと思う。

デボーションの中に心引かれる聖句がありました。

「さて、兄弟たち。御霊の賜物については、私はあなたがたに知らずにいてほしくありません。ご存じのとおり、あなたがたが異教徒であったときには、誘われるまま、ものを言えない偶像のところに引かれて行きました。ですから、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも「イエスは、のろわれよ」と言うことはなく、また、聖霊によるのでなければ、だれも「イエスは主です」と言うことはできません。」（Ⅰコリント12:1-3）

パウロはコリントの人に神を信じ、受け入れた者には御霊が賜物を下さることを知って欲しかったんだと思います。今の自分も聖霊の働きを感じるからこそ、神を慕い、神に栄光を帰すのだと思います。

（畑中伸之）

弱い人たちには、弱い者になりました。弱い人たちを獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。何とかして、何人かでも救うためです。私は福音のためにあらゆることをしています。私も福音の恵みをともに受ける者となるためです。」（Ⅰコリント9:22-23）

クリスチャンになってから、友人に証しをしました。福音を伝えたかったのです。すると、友人からクリスチャンになると、問題をそのように考えるようになるものなのねと言われ、その後、口には出しませんでしたが、「私には無理」と心の声が言っているような、表情をされたのを思い出します。

後にお会いしお世話になった、フィブス宣教師、ベーカー宣教師、メリー宣教師、そして尊敬する年配の兄弟姉妹方のことを思い出します。

どなたも、私たちに合わせて仕えて下さっていたのだと思います。心を開いて話しを聞きたいと思ったものでした。

福音は、ただ語れば良いというものではありませんね。よくよく主に祈って、へりくだってお付き合いしてゆけますようにと教えられました。（福島三弥子）

自分の好みにしたがって自分たちのために教師を寄せ集め、……」（Ⅱテモテ4:3）

コロナで制限された生活の影響がじわりと表面化されているような気がします。私の教会の礼拝も説教原稿を読んで家で礼拝を持つ期間が断続的にありました。

その時「SNSで色々見たけれど、この先生のがいいわよ」と、勧めてくれた姉妹がいました。色々見た中でこの先生のが一番いいと娘さんが勧めてくれたそうです。私はほとんどユーチューブを見ませんので、聞き流しておりました。

このテモテ書の御言葉を読んだ時に、この御言葉のような誘惑が潜んでいるのではないかなと、思いました。作り話に反（そ）れてはいかないでしょうが、耳障（みみざわ）りのよい言葉を求めてしまう危うさがあるように思いました。

今はオンラインでかなりの教会が、説教を配信しています。若者の伝道の為には重要な方法と思いますが、活用に注意がいるなと思いました。

「……それは、滅び行く人々におおいがかかっていると言うことです。……」（Ⅱコリント4:3）

逆に言うと全ての人々が信じる訳ではない。伝道の成果がないとしても落胆せず、忠実に託された救いの証を語り続けるように、しようと思いました。宣べ伝えた後は主にお任せするということを、改めて知らされました。（広瀬裕子）

信じられたらどんなにいいだろう、と思いながら、自然や人間の常とは相容れないような神の言、また、他の信仰者はそうかもしれないが自分はそうではない、とか、いろいろ理由をつけては神の言をそのまま受け取らないでいました。

それが最近続けて「アブラハムの信仰」を学ぶにつれて、それがどんなに大きな間違いであったかを思い知らされました。

信じないでいたばかりに、これほど長い間、鬱々（うつうつ）していたなんて何て馬鹿だったんだろうって思ってます。不信仰な私をお許しください。

これからは、アブラハムの信仰で神の言葉を受け取り、信じてゆきます。この学びができたことをとても感謝しています。（高橋美枝）

たとえ私たちの地上の住まいである幕屋が壊れても、私たちには天に、神が下さる建物、人の手によらない永遠の住まいがあることを、私たちは知っています。」（Ⅱコリント5:1）

パウロは人の体を幕屋にたとえて言います。人はその「地上の住まいである幕屋が壊れて」（1節）

肉体は死にます。けれどもクリスチャンは、死んだらそれで何もかも終わり、無に帰してしまうのではないことを知っています。「天に神が下さる建物」があると、パウロはコリント教会の信者を励ましました。「人の手によらない永遠の住まいがある」のです。

私たちが今住んでいる地上の家が取り壊されても、すなわち、私たちが死んでこの肉体を離れても、天には新しい体、永遠に保証された家があります。それは、人の手ではなく、神の御手で造られた家です。今のこの体は、病み衰えていますが、天で与えられる体を新しい着物のようにまとえる日を、首を長くして待っています。また、このように地上の体で過ごしている間は、イエス様と共に過ごす天の永遠の家から離れていることもよく知っています。

地上でこの肉体のままでいようと、肉体を離れて主と共に天にいようと、私たちの目的は、主に喜ばれることです。善であれ悪であれ、地上の体でいる時の行いに応じて、私たちは、それぞれ、ふさわしい報いを受けるでしょう。

私たちが住んでいる地上は、どうでしょうか。毎年のように襲って来る災害は日本だけではありません。世界に目を向けても、無益な戦争により家を奪われる等、地上の歩みには困難があります。

主を信じる私たちも、地上を離れ、天の住まいに行くことになるでしょう。

イエス様、どうぞ私に、いつも、あなたに喜ばれる歩みをさせて下さい。（木村邦夫）

確かにこの幕屋のうちにいる間、私たちは重荷を負ってうめいています。それは、この幕屋を脱ぎたいからではありません。死ぬはずのものが、いのちによって呑み込まれるために、天からの住まいを上に着たいからです。そうなるのにふさわしく私たちを整えてくださったのは、神です。神はその保障として御霊を下さいました。」（Ⅱコリント5:4-5）

パウロはこの幕屋つまりこの世の肉の自分を脱ぎ去ってしまいたいからと言わずに、その上に天からの住まいを着たいからだと言いました。自分を見るより天を見ることの重要性を示されている気がします。自分を見てうめくのではなく、天を見て「着たい！」と願うパウロだったと思います。

パウロは更に、天からの住まいを着るのにふさわしく私たちを神様が整えてくださったと、その保障として御霊を下さったと断言しています。

私たちは日々いろいろな問題に直面し、悩みますが、それによって信仰が足りないとか、信仰の揺らぎを感じることはお門違いなのだという認識が必要です。救いの確信を学ぶことは、健全な信仰生活に欠かせないと思いました。（永井亮子）

しかし、神に感謝します。神はいつでも、私たちをキリストによる凱旋の行列に加え、私たちを通してキリストを知る知識の香りを、いたるところで放ってくださいます。私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、神に献げられた芳しいキリストの香りなのです。」（Ⅱコリント2:14-15）

パウロは、心に安らぎがない時でも、「しかし、神に感謝します。」と、語ります。日々の生活の中で、自分の思い通りに事が進まない時でも、芳しいキリストの香りを放つことが出来るよう、信仰生活を送りたいと願います。（外處トミ）

神様が　我に与えし　キリストの
芳しい香り　命への道

2022年8月31日

神に祈る唯一のしあわせを頂き、此れ程に心の支えになる事を知りました。それは、娘の突然死で大きなショックに心の置き場もなく悲しみ辛い思いの中、一心に神に祈る事です。

感謝のことば以外にありません。娘の死に依って日々イエス様にすがり心の置き場が持て、何よりのしあわせを頂いて感謝のみです。年老いて来ましたが、此れからもイエス様にすがって生きて行きたいと願っています。（外處ヌイ子）

神は過ぎ去った時代には、すべての国々の人が、それぞれの道を行くままにしておかれたが、それでも、ご自分のことをあかししないでおられたわけではない。すなわち、あなたがたのために天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物と喜びとで、あなたがたの心を満たすなど、いろいろのめぐみをお与えになっているのである。」（使徒14:16-17）

私たちは神様のお姿を見ることは出来ませんが、それでもなお神様は私たちの日々の生活を支え、心を支え、私たちに神様の存在をお示しになってくださいます。今日も神様の恵みに感謝します。

（外處光歩）

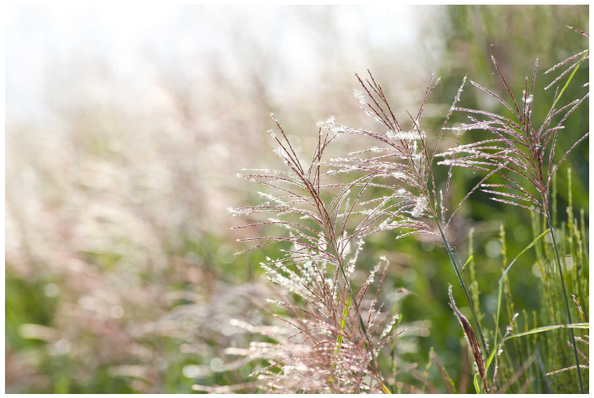
同じ一つの御霊がこれらすべてのことをなさるのであり、御霊は、みこころのままに、一人ひとりそれぞれに賜物を分け与えてくださるのです。」（Ⅰコリント12:11）

私にも御霊の賜物を与えてくださっていることを感謝します。賜物を生かして主に喜ばれる日々を歩んでいけたら幸いです。（外處結実）

ですから、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも「イエスは呪われよ」ということはなく、また、聖霊によるのでなければ、だれも「イエスは主です。」と言うことはできません。」（Ⅰコリント12:3）

この御言葉は本当に感謝です。自分の信仰に自信がなくても、救い主なるイエス様に助けを求め、何かが起こる度に御心を捜し求め、自分の計らぬ方向に導かれて幸いをいただく経験等を通じて、私の心は鈍くても神様は確実に導き続けて下さっていることを覚え、御国への道のりを歩ませていただいていることに、この世のものではない安心感をいただくことができます。

だた、主を待ち望みます。（外處徳昭）



兄弟たち。私があなたがたに宣べ伝えた福音を、改めて知らせます。あなたがたはその福音を受け入れ、その福音によって立っているのです。私がどのようなことばで福音を伝えたか、あなたがたがしっかり覚えているなら、この福音によって救われます。そうでなければ、あなたがたが信じたことは無駄になってしまいます。

私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書に書いてあるとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりに、三日目によみがえられたこと、また、ケファに現れ、それから十二弟子に現れたことです。その後、キリストは五百人以上の兄弟たちに同時に現れました。その中にはすでに眠った人も何人かいますが、大多数は今なお生き残っています。その後、キリストはヤコブに現れ、それからすべての使徒たちに現れました。そして最後に、月足らずで生まれた者のような私にも現れてくださいました。

私は使徒の中では最も小さい者であり、神の教会を迫害したのですから、使徒と呼ばれるに値しない者です。ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは無駄にはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。働いたのは私ではなく、私とともにあった神の恵みなのですが。」（Ⅰコリント15:1-10）

パウロはコリントの信者たちに「福音」のことを思い起こさせています。その福音は、パウロが彼らに宣べ伝えたもの、彼らが受け入れ、また、それによって立っていたものでした。これはコリントの信者たちにとっては新しい教えではありませんでしたが、この重大な時に、彼らがそのことを思い出すことは必要でした。この「福音」によって、コリントの信者たちは「救われた」のです。それからパウロは次のように書き加えています。

「あなたがたがしっかり覚えているなら、この福音によって救われます」。復活の福音によって、彼らはすでに救われていました。「復活」は根本的な事柄でした。それがなければ、キリスト信仰もありません。この節は、福音のことばをしっかりと保つかどうかを、コリントの信者たちに問いかけるものになっています。

パウロがコリントの信者たちに「伝えた」メッセージは、パウロも神の啓示によって「受けた」ものでした。

そのメッセージの第1に主要な教理は、「キリストは、聖書に書いてあるとおりに、私たちの罪のために死なれた」ということです。これはキリストの死が身代わりの死であったことを強調しています。キリストは、自分自身の罪のために死なれたのでもなければ、殉教者として死なれたのでもありません。

キリストは「私たちの罪のために死なれた」のです。キリストが死なれたのは、私たちの罪の報いを代わりに受けるためでした。

これはみな「聖書に書いてあるとおり」のことでした。この「聖書」は旧約聖書を指しています。新約聖書はまだ文書のかたちにまとめられていなかったからです。旧約聖書は、キリストが人々の罪のために死なれるということを実際に預言していたのでしょうか。イザヤ53章5-6節はそのことを十分に証明しています。キリストの葬りはイザヤ53章9節に、キリストの復活は詩篇16篇9-10節に預言されていました。

パウロが「聖書」のあかしをどのように強調しているかに注目するのは重要です。私たちは、「聖書は何と言っているか」と問うことによって、自分たちの信仰に関するすべてのことを常に吟味すべきです。

5-7節には、復活のキリストを目撃した者たちが列記されています。主は、まず最初に、「ケファ」（ペテロ）に現れてくださいました。これは実に感動的なことです。主を3度も否んだ不忠実な弟子が、よみがえられた主に個人的にお会いするという特権にあずかったのです。まことに、主イエス・キリストの恵みは、何と大いなるものでしょう。

「それから」主は「12弟子」にも現れてくださった。実際には、その時12人が全員そろっていたわけではありませんが、弟子たちの一団を示すために、「12弟子」という表現が用いられたのです。

福音書に記録されていても、この第1コリント15章のリストに含まれていない出来事（エマオの途上の弟子に現れたこと等）もあります。神の御霊は、ご自分にとって最も適切なものをお選びになられたのです。

主が「五百人以上の兄弟たち」に現れてくださった出来事は、「ガリラヤで起こった」と一般に信じられています。パウロがこれを書き記した頃には、この兄弟たちの大部分はまだ生きていたが、主のみもとに帰って行った者たちも何人かいました。パウロが言っていることが本当かどうか、異議を唱えようと思う者がいるなら、証人たちがまだ生きているのだから、彼らに尋ねることができるということです。

また、ここの「ヤコブ」がどのヤコブのことなのかを知る手立てはありませんが、ほとんどの注解者が「主の兄弟であるヤコブのことだ」と考えています。7節には、主が「すべての使徒たち」に現れてくださったことも記されています。

パウロは次に、復活のキリストがパウロ自身にも個人的に現れてくださったことについて語っています。彼は、ダマスコに向かっていた時、天からのまばゆい光に照らされ、栄光のキリストに面と向かってお会いしたのです。「月足らずで生まれた者」とは、流産とか早産といった意味です。

パウロは、他の使徒たちに比べると、ずっと後になってから使徒になったのだから、自分は未熟児として生まれたような者であり、その意味において、他の使徒たちよりも劣っている、と語っているのです。パウロは、かつて教会を迫害したことに対する自責の念を込めて、このような表現を用いたのです。

パウロは、救い主に面と向かってお会いするという特権にあずかったことを思うと、「自分は使徒と呼ばれるに値しない者だ」という気持ちでいっぱいでした。

彼は、自分が「神の教会を迫害した」こと、そして、それにもかかわらず、主が彼を使徒として召してくださったことについて考えました。それゆえ彼は、自分を低くして、「私は使徒の中では最も小さい者であって、使徒と呼ばれる価値のない者」であると言っているのです。

彼は、「たとえ自分が今どんな人物であったとしても、『神の恵みによって』そのようになったのだ」ということを、すぐに認めています。

そして、彼はこの恵みを当然のこととして受けることはしませんでした。むしろ、彼はその恩義に報いなければと強く感じ、たゆむことなく働き、自分を救ってくださったキリストに仕えたのです。

それにもかかわらず、実際の意味から言えば、パウロ自身がそうしたのではなく、パウロとともに働かれた「神の恵み」によるものだったのです。私たちにもこのすばらしい「神の恵み」があることに感謝ですね。（福島勲）

貴重なご感想をありがとうございました。
次回はマナ９月号の感想を10月10日までに福島兄弟へお寄せ下さい。（永井）